



教育の質を高める 紙の教科書とノート

酒井 邦嘉

東京大学大学院教授

タブレット端末の使用で懸念される問題として、三点を指摘したい。

第一に、検索による思考力の低下である。検索機能の多用により、自分で考える前に検索するという傾向が助長されてしまう。安易な検索に頼った結果として、自らの論を形成する力や、足りない情報を想像力で補う力が低下し、情報を鵜呑みにしがちになる。一方、紙の本で調べる場合は、該当する本を探して読み込む必要があるため、その過程で十分に咀嚼する時間が確保できる点が異なる。

第二に、教材との併存による情報過多である。端末では得られる情報が紙の本とは桁違いであるため、物事を広く浅く表面的に受容することが優先されてしまう。

第三に、端末機能による注意散漫である。多機能の端末では、SNSやニュース、ゲーム等がいつも気になるため、授業に対する集中度の低下は明らかだろう。

次に、紙の教科書とノートの使用が教育に資する三点を強調したい。

第一に、紙の空間的情報が記銘と想起に役立つ。製本された見開きの教科書のどのあたりに書いてあったか、ノートのどこに自分で書き留めたか、といった位置情報は、学習に大きな効果をもたらすからだ。脳の記憶システムは必要なことだけを効率よく覚えるわけではなく、付加的な情報やエピソードが記憶の手がかりを作り、その定着を促すのである。タブレット端末では、限られた画面でスクロールすることにより、文書との相対的な位置情報が失われてしまう。

第二に、本や板書の内容を書き写すという一手間が考えるゆとりを生む。タブレットではコピーや写真撮影が手軽にできてしまう反面、その一瞬では頭にほとんど何も残らないだろう。

第三に、資料の相互参照が新たな発想を生む。紙の本やノートといったさまざまな資料を机上に置いて参照することにより、それらの整合性を確かめ、個々の要素を組み直すことで、新たな創造のヒントとすることができる。これをウィンドウの切り替えで実現するには、巨大なディスプレイを用意するか、相当な短期記憶の持ち主でもない限り無理であろう。

実は紙の本の方が、端末よりはるかにハイテクなのである。